

2020年7月12日（日）聖霊降臨後第6主日

銀座教会 主日家庭礼拝

礼拝招詞 「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

ローマ5：5

主の祈り

使徒信条 我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女(おとめ)マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体によみがえり、永遠の生命を信ず。 アーメン。

讚美歌 24

聖書 使徒言行録16章25～34節

25 真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。26 突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。27 目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げたしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。28 パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、30 二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」32 そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。33 まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。34 この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

牧会祈祷

天の父なる神さま。聖霊の導きのより主の招きに応じて家庭礼拝を捧げられます幸い、感謝いたします。いと小さき私を覚えてくださり、憐れみをもって同伴してくださる神さま。すぐる一週間あなたが共におられたにもかかわらず、いないかのように振る舞い、嘆き悲しんできたことを御前に懺悔いたします。自分の力だけで生きようとしていました。あなたに祈りつつも、主にお頼りすることができずにいたことを告白します。主の憐れみにより頼み、あなたの導きに信頼して主を見上げます。

新型コロナウイルスと戦う最前線におられる医療従事者のために感染者とそのご家族のために主の助けと癒やしとお与えください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通してお祈りいたします。アーメン

アンティオキアにおいて、バルナバと袂を分かったパウロでしたが、同行者シラスと共にシリア・キリキア州の諸教会を力づけて周り、テモテという新たな弟子も得ました。一行はその後、神様からの決定的な導きを確認して、マケドニア州への伝道を開始します。

「パウロの第二回宣教旅行」と呼ばれる旅路の始まりでした。一行は、アレキサンダー大王の父王に当たる、フィリッポス2世によって創設された「フィリピの町」にやって来ました。その町で、占いの霊に取りつかれた一人の女性奴隷を救ったことにより、奴隷の主たちから反感を買ってしまいます。パウロとシラスは偽りの嫌疑をかけられ、捕らえられた後、衣服を没収され、何度も鞭打たれ、足枷を嵌められ、牢屋の最奥の部屋に入れられました。本日は、そのフィリピの町の真夜中の牢屋で起きた出来事について、ご一緒にお聞きしたいと思います。

「真夜中」のことです。パウロとシラスが、「**賛美の歌をうたって神に祈っている**」、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていました。パウロとシラスは獄中で、慣れ親しんだ賛美歌を歌っていました。おそらく、詩編の書に収められた詩に、独特な節と抑揚をつけて歌ったものと思われます。私たちには神さまから、礼拝の自由が与えられています。獄中でさえも、神様を礼拝することはできます。家庭にある礼拝はなおさらのことです。どのような場所にあっても、神様に礼拝をおさげすることができるという事実を、本日の箇所は、私たちに向けてはっきりと伝えてくれています。

パウロとシラスが神様を賛美しているときのことで、突然、牢を土台から揺り動かすような、大きな地震が起きました。それにより、牢の扉がみな開き、すべての囚人の鎖が外れてしまいました。パウロとシラスの足枷も外れてしまいました。眠っていた看取は飛び起きて、牢の惨状を目の当たりにしました。開き切った牢屋の扉を目の当たりにし、彼はパニックに陥ってしまいました。看取としての責任を果たすことのできなかつた無力な自分に、引き抜いた剣を深く突き立てようと、反射的に身構えました。その時、暗闇の中から大声が聞こえてきました。「**自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。**」—暗闇とパニックのゆえに、看取は現状を適切に把握することができていませんでした。

「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」—パウロのこの言葉を直訳すると、「あなた方は誰も、悪いことを実行してはいけない」となります。大変含蓄のある言葉ではないでしょうか。おそらくは、我を失い、命を絶とうとした看取だけでなく、開かれた扉から逃げ出そうとする囚人たちもまた、そんな「悪いこと」をしてはいけないと、ここでパウロに諭されていたのだと解せます。神様の確かな御守りのもとにあるパウロだけが、不測の事態の中で平静を保っていました。コロナ騒動の中、悪化した人々のモラルや、そこから生じる様々な事件や暴動を私たちは経験しました。不測の事態の中、神様の御守りを信じて平安を保ち、隣人に仕える姿勢を失わないことの大切さを、本日の箇所から学び取ることができると思います。

明りを持って来させた看取は、ここでようやく、適切な状況把握を行うことができるようになります。パウロとシラスの前に震えながらひれ伏した彼は、二人を外に連れ出して言いました。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」看取は自らの責任を果たすことができませんでした。職を失うことは確実であり、それどころか、たった今しがた、自らの命までも失うところでした。看守の心に、「救い」に対する渴望が芽ばえました。看守がパウロとシラスに対して投げ掛けた「先生方」という呼称は「主（あるじ）たちよ」とも訳せます。主イエス・キリストの「主」です。救われるためにより頼むべき御方が誰であるか、看守はまだ知りませんでした。そこで、看守は差し当たっては、自らの命の危機を救ったパウロたちを新たな「主たち」と見なしました。パウロとシラスは、看守が本当により頼むべき「主」を指し示します。「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。**」先ほどの看守の言葉は、もとの言葉では、すべて一人称で語られていて、「私が救われるために、私は何をすべきでしょうか」と訳せます。誰でも余裕のない時には、自分一人の身の上を心配するだけで手一杯です。自分の救いこそ、私たちの切実な関心でなくて何であるのでしょうか。しかし、看守の発言を受けて、使徒たちは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と答えました。看守として自らの役目を果たすことができず、自分の命を投げ打とうとしたこの人も、主イエス・キリストを信じる信仰のゆえに、自分のみならず、家族をも救うことができると言われています。自らの救いを切実に求める信仰を、神様は家族や隣人の救いのために必ず用いてくださる御方です。

その後の顛末も、全ては真夜中の内に起こった出来事でした。使徒たちは看守とその家の人たちに「**主の言葉**」を語りました。看守は鞭打ちで抉られた使徒たちの傷を洗ってやりました。神様の救いの内に入れられ、看守は人に仕える者とされました。看守の一家は、救われた“しるし”として「**洗礼**」を受けました。その後、看守は使徒たちを自らの家に導き、自分が「神を信じる者」になったことを「**家族ともども喜んだ**」と記されます。真夜中の牢屋で起きた一連の出来事は、「**賛美歌**」、「（パウロやシラス、看守の身に起きた）救いの出来事」、「**主の言葉の解き明し**」、「**洗礼**」という流れで物語られます。これらは、私たちの礼拝の重要な構成要素であることをおぼえたいと思います。救いの出来事は礼拝の中で起こります。そして、その礼拝はどのような非常時にも、変わらず守ることが許されているのです。私たちの礼拝の締めくくりに相応しい感情は「喜び」です。看守は「神を信じる者」になったことを「**家族ともども喜んだ**」とあります。パウロは後年、フィリピの教会の信徒たちに宛てた手紙の中で、次のような言葉を書き記しました。「**主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい**」（フィリピ 4:4）。手紙の受け取り手であるフィリピの教会員たちの中には、本日の物語の中で、家族と共に救われたあの看守も含まれていたことでしょう。日曜の礼拝、使徒からの手紙が朗読されるたびに、救われた時の「喜び」が、看守の記憶の中に鮮やかによみがえります。どのような非常時にも、礼拝が赦されているということは、どのような非常時にも、喜ぶことが許されているということです。日曜の礼拝を起点として、感謝と喜びの生活を再開しましょう。

